5 平和首長会議への加盟

千葉市は、平和都市宣言20周年を迎えた平成21年（2009年）、平和首長会議に加盟しました。

平和首長会議とは…

昭和57年（1982年）6月24日、ニューヨークの国連本部で開催された第2回国連軍縮特別総会において、荒木武・広島市長（当時）が、世界の都市が国境を越えて連帯し、ともに核兵器廃絶への道を切り開こうと「核兵器廃絶に向けての都市連帯推進計画」を提唱し、広島市・長崎市両市長から世界各国の市長宛てにこの計画への賛同を求めました。

平和首長会議は、この計画に賛同する世界各国の都市で構成された団体です。

千葉市は平成21年（2009年）8月3日に加盟し、令和8年(2026年)6月1日現在、世界166カ国・地域8,579の都市が加盟しています。



[ヒロシマ・ナガサキ]

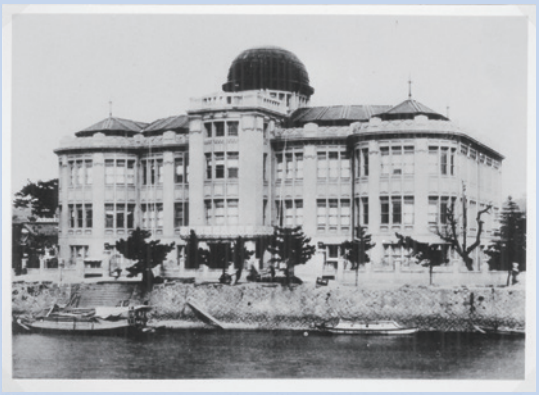
太平洋戦争では、日本全国の都市が空襲による大きな被害を受けました。

日本の主な都市はことごとく焼け野原となり、わずか半年あまりの間に50万人を超える一般市民が犠牲となりました。

昭和20年（1945年）8月6日午前8時15分広島へ、8月9日午前11時2分長崎へ、それぞれ原子爆弾が投下されました。日本の空襲被害をヒロシマ・ナガサキに触れずに語ることはできません。

この悲惨な記憶を語り継いでいくことは、千葉市の戦争被害を語り継いでいくこととともに、平和首長会議の一員として、唯一の戦争被爆国としての我々の使命です。

昭和20年（1945年）8月6日午前8時15分　広島へ原爆投下



被爆前の原爆ドーム（広島県産業奨励館）
当時はその川面に映える美しさで、観光名所の一つでした。
（広島平和記念資料館提供）



原爆投下後の変わり果てた姿（米軍撮影）
被爆時建物内の職員は全員即死でした。
（広島平和記念資料館提供）

昭和20年（1945年）8月9日午前11時2分　長崎へ原爆投下



浦上天主堂（米軍戦略爆撃調査団撮影）
30年以上の歳月をかけて大正14年（1925年）に完成した、赤レンガ造りの天主堂は、原爆の爆風で粉々に壊れてしまいました。
（長崎原爆資料館所蔵）



三菱重工業長崎兵器製作所大橋工場（小川虎彦氏撮影）
工場は鉄骨に鉄板を張って作られていましたが、爆風で鉄板は粉々に飛び散り、鉄骨は折れ曲がり、工場は倒れました。
（長崎原爆資料館所蔵）

[ヒロシマの記憶] ※広島平和記念資料館提供

「広島平和記念資料館平和データベースのトップページ」

原爆被害の遺品

大下靖子さんの夏服（大下定雄氏寄贈）





県立広島第一高等女学校1年生の大下靖子さん（当時13歳）は、土橋地区の建物疎開作業に動員され、被爆しました。同級生と2人で己斐に避難して夕暮まで民家にいたのち、己斐国民学校に収容されていたのを発見され大竹から入市した救援隊によって大竹の両親のもとに運ばれました。その時はまだ息があり、その日の様子を両親に語り、水を欲しがりましたが、当日深夜12時前に死亡しました。

山下博子さんの抜けた髪（山下博子氏寄贈）



大手町の自宅で被爆した山下博子さん（旧姓吉田、当時18歳）は、壊れた家の下敷になりました。弟の祐策さん（当時6歳）とともに瓦礫の下から這い出し、はだしのまま火の手の上がる街から郊外へと逃げました。博子さんは、両手、両肩、両足にひどいけがを負っていました。一見元気だった祐策さんも、21日に倒れ、髪の毛が抜け落ち、高熱が出た後、鼻から大量に出血して24日に死亡しました。博子さんの髪の毛も、祐策さんと同じ21日に、一気に抜け落ち、病状が悪化しましたが、なんとか命はとりとめました。これは、懸命に看病していた母親の恭さん（当時46歳）が、万が一を思って、娘の形見にと大事にとっておいたものです。

折免滋さんの弁当箱（折免シゲコ氏寄贈）



県立広島第二中学校1年4学級の折免滋さん（当時13歳）は、中島新町の建物疎開作業現場で被爆しました。母親のシゲコさんは破壊された街を必死で捜索しましたが、なかなか発見できず、知人からの情報でようやく8月9日早朝、滋さんの遺体と、遺体に抱えられた真っ黒に焼けたお弁当箱と水筒を発見しました。滋さんは、出征中の父と兄に代わって、シゲコさんのために山や竹やぶを開こんして畑を作っていました。その日のお弁当の中身は、その畑から初めて収穫した作物でつくったおかずで、喜んで持っていったものでした。シゲコさんは、それを食べることなく死んでしまった滋さんが不憫でなりませんでした。



市立中学校生徒3人の遺品
（津田蔵吉氏・福岡重春氏・上田トヨ氏寄贈）

市立中学校1・2年生は、小網町の建物疎開作業現場で被爆し、多くの犠牲者を出しました。平和記念資料館では、亡くなった３人の生徒が身につけていた衣服を一体にして展示しています。帽子は１年生の津田栄一さん（当時13歳）、学生服は2年生の福岡肇さん（当時14歳）、ゲートルは、1年生の上田正之さん（当時12歳）のものです。

ゲートル…脛の部分に巻く布などでできた服装品

被爆者証言ビデオ（広島平和記念資料館平和データベースのホームページ）▶

[ナガサキの記憶] ※写真は長崎原爆資料館所蔵

被爆した長崎の街

昭和20年(1945年)8月9日の長崎市

人　口　　約240,000人

原子爆弾による被害者数（1945年12月末までの推定）

死　者　　73,884人

負傷者　　74,909人

（1950年／長崎市原爆資料保存委員会調査）

熱線による被害



熱線による物的被害

爆心地の近くでは、熱線のすさまじいエネルギーによって、燃えるものすべてが火をふきました。溶けたガラス、沸騰して泡立った瓦、焦げて黒くなった石などが、その激しさを物語っています。爆心地から遠ざかるにつれて熱線は弱まりますが、それでも2キロメートル以内では衣類、電柱、樹木などの表面が燃えたり焦げたりしました。

溶けた６本の瓶

爆心地より約 400m の商店跡から発見されました。高熱のため瓶の上部が溶けてくっついています。
（寄贈／岡田寿吉氏）

火災による被害

熱線と爆風による被害は、火災によってさらに増大しました。爆風の被害が家屋の半壊程度ですんだところも、後で起きた火災のために結局全焼しました。全焼壊家屋12,900戸、半焼壊家屋は、5,509戸にのぼっています。火災は犠牲者の数も増大させました。倒れた家の下敷きになっても、火さえ来なかったら、外傷だけで助かったはずの人が、きわめて多くいます。



焼き尽くされた岩川町一帯

爆心地より南へ800m付近。
ここは静かな住宅街。自慢の並木もすっかり焼けてしまいました。
画面に見える一筋の県道も最初は堆積物に覆われていました。
（撮影／小川虎彦氏）



熱線による人的被害

熱線のわずか数秒間の高熱は、人々の皮膚に浴びせられました。熱線のすさまじさは通常の火傷では考えられない被害をもたらしました。爆心地からの距離により負傷の程度は異なりますが、重傷になると表皮は焼けただれてズルズルとはがれ落ち、皮下の組織や骨までが露出しました。1.2キロメートル以内では熱線だけでも致命的であり、爆心地付近では、あまりの高熱に一瞬のうちに身体が炭化し、内臓の水分さえ蒸発したと考えられています。

頭がい骨の付着した鉄かぶと

爆心地付近で発見されたもの。内部に被爆者の頭がい骨の一部が付着しています。（寄贈／原田敦雄氏）

爆風による被害



爆心地より1キロメートル以内では、一般の家屋は原型をとどめないまでに破壊されました。鉄筋コンクリートの建物などがところどころに残りましたが、いずれも建物とは名ばかりの無惨な状態でした。つぶれたり、大きく変形したありさまが、爆心の方向を指し示しています。このようなすさまじい爆風に人々は吹き飛ばされ、散弾のような無数のガラスや木片を全身に浴びました。

城山国民学校
爆心地より西へ約５００m。
鉄筋コンクリート三階建ての校舎は、被爆直後はかろうじて骨格をとどめていましたが、爆風でもろくなっていたこともあり、その後の風雨などにより三階から崩れ落ちました。
(米国陸軍病理学研究所返還写真)

放射線による被害

放射線による人体の被害

原爆の放射線は人体を刺し貫き、そのときいろいろな細胞を破壊します。損傷の程度は被爆した量によって異なりますが、爆心地から１キロメートル以内で被爆した人のうち、無傷であっても、その大多数の人が死亡しています。放射線の破壊力はそれほど強烈でした。人体におよぼす害は、爆発のときだけでは終わりません。放射線は身体の奥深くを傷つけ、時がたつにつれて様々な症状を呼び起こします。あの夏に始まった放射線障害の苦しみは、いまだに消えることがないのです。



著しく肥大した脾臓(慢性骨髄性白血病):4000g
*右は同年齢の脾臓(対照):110g

これらの資料の一部は、広島平和記念資料館と長崎原爆資料館で実際にご覧いただけます。また、20 ページからの千葉市の戦跡めぐりのコーナーでは、千葉市内にあった軍事施設などの戦跡を紹介しています。是非とも実際の遺品や資料、戦跡などを目で見て、肌で感じて、戦争の悲惨さ・平和の尊さに思いを馳せてみてください。

被爆証言（長崎市のホームページ）▶